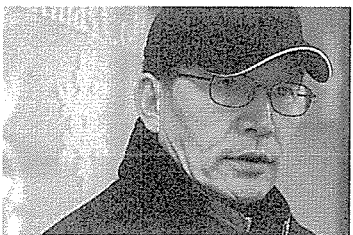


# 辺見庸

(へんみょう)

## 略歴

一九四四年宮城県石巻市生まれ。七〇年  
共同通信社入社。北京特派員、ハノイ支  
局長、外信部次長などを経て、九六年退  
社。七八年中国報道で日本新聞協会賞、  
八七年中国から国外退去処分を受ける。  
九一年『自動起床装置』で芥川賞、九四  
年『もの食う人びと』で講談社ノンフィ  
クション賞、詩文集『生首』で中原中也賞、  
詩集『眼の海』で高見順賞を受賞。他著  
に『赤い橋の下のぬるい水』『永遠の不  
服従のために』『私とマリオ・ジャコメッ  
リ——〈生〉と〈死〉のあわいを見つめて』  
『青い花』『霧の犬』など多数。



〈受賞のことば〉

大別して三つのしゅるいのあることがある。やりたいこととやりたくないこと。そして、やらなければならないことである。本作は、わたしにとって、やらなければならないこと、そして、死ぬまでにやっておかないとどうにも示しがつかない、面目がたたない……ことであった。では、いまの気分はどうか？ 示しがつき、面目がたたったのか。すっきりとしているか。否！ 宏漠たる砂漠を苦勞してここまであるいてきたものの、気がつけば、まだ砂原の入り口も脱していないのであった。なんとということだろう。つまり、本作をやったことで終えたとおもったら、やらなければならない、テーマの端っこがやっとかいまみえてきたていど、というしだい。情けない。だいいち、わたしはだれに示しがつかず、だれに面目がたたないとおもったのだろうか。親にか、神様にか。否！ じぶんに、である。したためた本人がいちばんよく知っている。わたしは非力である。非力であった。気づくのがずいぶんおそかった。手おくれといえ、そうである。けれども、気づいてよかった。ついに気づきもせずに死んだら、それこそ示しがつかず面目がたたない。そのようなことを城山三郎さんをご存知であろう。むだな情熱でも、やらざるをえないことがあると。最後、後にひとこと。本作をひとりでも多くの若者が手にとりますように！